

2016年8月18日

報告：「知床赤岩地区 羅臼昆布 エコツアー」（2016年8月12日～13日）に参加して

金沢大学 人間社会研究域 歴史言語文化学系・教授

結城 正美 （専門分野：環境文学）

1 はじめに

船が赤岩地区に近づくにつれ、水面下にはっきりと昆布の群生が見えてきた。陽の光を浴びて昆布がうじゃうじゃ生えている。それを若い漁師たちが船の上から腰をかがめ竿を操りながらせっせと採っている。白山の麓に生まれた山育ちの私にとって海の世界は異文化だが、この風景は馴染み深さを感じさせるものであった。というのも、山菜やクレソン、こぼれ種などで自然と育った大葉がそこらじゅうに生えて、採って食べないと大変なことになる、という私のよく知る現実と重なる風景であったからだ。

海と山は対照的な環境であるように見えるが、魚であれ昆布であれ山菜であれ、自然の恵みとして食べものに接する場があるという点で共通する。そこでは、人が自然の恵みを享受するだけでなく、自然のバランスの維持に関わるある種の責任感を人に抱かせるような、人と環境との関係が構築されている。赤岩地区に所狭しと船を浮かべ、ツアー案内役の元漁師や船頭さんとユーモアたっぷりに言葉を交わす漁師たちを見ていて、この人たちはもちろん「商品」として昆布を採っているわけだが、それだけでなく、せっせと昆布を採らないと海の中が昆布だらけになってしまいかねないという、愛情と混じりあった責任感に駆り立てられているのではないか、と想ったりもした。

じつは、私がそのように感じたのには読書経験が関係している。上述した赤岩地区接岸時の風景は、南九州・水俣の暮らしを描いた石牟礼道子の『椿の海の記』の次の一節を思い起こさせるものであった。

・・・あした、あさりご飯をつくろうとおもえば今日、あさりを採りにゆく。すると、あさりだけでなく、アオサも巻貝（びな）の類もはまぐりも潮吹き貝もぶう貝も、ひじきまで採ってくる。欲ばって採ってくるのでなしに、採って帰らぬと、海の中の貝たちの人口がふえてふえて、うじゃうじゃになりはせぬかとおもうくらいに、もうそこらじゅうにいるのだったから。海に降りる山道のついでに、つわ藨もわらびも山椒も採れた。山道伝いに、一日海に下れば、ゆうに一週間分は、多彩に食べ分けられるしゅんの海山のものを、背負いながら帰っていた。春の海山のものがそうであったように、秋のものはなおさらにまた種類がことなり、歳時記とは暦の上のことではなくて、家々の暮らしの中身が、大自然の摂理とともにあることをいうのだった。¹

¹ 石牟礼道子『椿の海の記』1976年、朝日文庫、1980年、119頁。

ここに語られているのは、〈自然との共生〉が実践された暮らしにほかならない。無論、石牟礼は「共生」という言葉は使っていない。しかし、「採って帰らぬと、海の中の貝たちの人口がふえてふえて、うじゃうじゃになりはせぬかとおもうくらいに、もうそこらじゅうにいるのだった」という言葉に示されているように、石牟礼の描く水俣漁村の人びとは海の生き物の「人口」増加が気になって仕方がない。放っておけないのである。〈自然保護〉といったメッセージ性を感じさせることなく、自然との持続可能な付き合い方を読者に考えさせる、そういう文学作品の一つである。

本ツアーで最も強い印象を持ったのは、知床半島の生物・文化多様性である。「原生自然」や「秘境」といった言葉で語られる知床が、じつは人の暮らす場であったということ、私はこのツアーに参加するまでほとんど知らなかった。世界遺産として保護されているからそれで良しとし、それ以上は考えなかった、というのが正直なところだ。ツアーを通して、昆布漁は海で完結するものではなく山・川・海のすべてを視野に入れた営みであり、そうした人の暮らしが知床の自然を維持する上で重要な役割を果たしてきたことを学ぶにつれ、知床には原生自然という顔だけでなく、人の暮らしによって維持された自然という顔があることを知った。

2 人の手が入った自然保護

持続可能な昆布漁のために海だけでなく川と山の手入れもする——そのような人と自然との関係が「世界遺産・知床」の土台の一部となっていることは間違いない。しかし、この点は〈原生自然・知床〉のイメージに隠されてしまっているのではないだろうか。そうだとすれば、人を締め出した形での自然保護が理想とされる危険性がある。私はここであえて「危険性」という言葉を使いたい。というのも、アメリカ合衆国で既に見られるように、もともと暮らしていた人を保護区域から締め出したことにより却って自然環境が荒れてしまうことが往々にしてあるからだ。

アメリカの民族植物学者であり作家のゲーリー・ポール・ナブハンの『雨の匂いがする沙漠』にこんな話がある。アメリカ南西部の乾燥地帯にトホノ・オトハム族が長く暮らしていた場所があり、そこは植物が繁茂し鳥が飛来するオアシスのような場所であった。荒野にかくも生物多様性に富む場所があることに目をつけられ、国立公園に指定されたのだが、その際、住人は公園敷地からの退去を命ぜられた。人の住まなくなった公園敷地は次第に荒れ（人によっては〈原生自然〉に戻ったと言うかもしれない）、飛来する鳥の数も種類も減った。ナブハン是这样記している。

・・・国立公園部は野鳥保護区域を作り、観光客相手に、沙漠のオアシスに集う野生植物や野生動物の姿を垣間見せようとした。

が、計画どおりにはいかなかった。せつかく得た「自然のまま」の保護区域に異変が起きはじめたのである。土地は異種混交性を失い、同時に鳥たちも姿を消しはじめた。古い木も枯れていった。それに見合う数の新しい木々が育たなくなった。・・・

毎年夏に育つ種子植物が、いまでは池のほとりにほとんど見られない。土地を耕し、灌漑水路を掘る人間たちがいなければ、鳥類や齧歯類が食物とするこれらの発芽もままならない。

・・・トホノ・オオトハム族の農夫である彼は、やがて次のように語った――

「あんたが言ったことを、考えていたんだがね。あっちのオアシスから鳥が減ってしまったという話。そりゃあつまり、鳥は人のいる場所に集まってくるってことだろう。人間がそこに住みついて働く。作物を植え、木に水をやる。すると鳥たちも来て、いっしょにすむようになる。そういう場所が好きなんだよ、鳥は。食べ物もたくさんあるし、こっちだっていっしょに仲良く暮らせるというものだ」²

人の手が入った自然保護への関心は、文学だけでなく政策においても顕著である。その例として、アラスカの国立公園設立をめぐる動きが挙げられる。環境派で知られるジミー・カーター大統領が任期満了直前、アラスカの開発を懸念し、大統領権限を利用しアラスカの多くの土地を 国定公園としてひとまず「保護」した。その際に問題になったのが、公園敷地内に暮らす先住民の存在である。国定公園・国立公園は「原生自然」保護を目的とするため、敷地内の人の居住は許されなかったが、アラスカでは先住民の暮らしが自然環境の維持に大きな役割を果たしており、人の暮らしを締め出した保護のあり方に疑問が投げかけられたのである。議論の結果、国定・国立公園として保護する自然は先住民の暮らしと不可分であるという認識のもと、先住民の居住に干渉せずに公園として指定することになった。³

以上はアメリカの例であるが、日本でも同様の議論を進めることが求められるのではないだろうか。これまで〈原生自然〉が強調されてきた知床半島の保護のあり方に、人の暮らしによって維持されてきた自然という一面を加えることにより、真に持続可能な保護のあり方を考えるための多角的な視点が確立されるはずである。そして、今回の昆布ツアーはそれを具体化するための強力なツールになるだろう。

3 ツアーの内容について

ここまでツアーから学んだこと、参加して考えたことを記してきたが、ここでツアーの内容について見解を示すこととする。

(1) 全体の内容・構成について

初日にビジターセンターで知床半島の模型を見ながら地形や気象や生態系の説明を受けたことは、翌日の現場訪問において有益であった。言葉による説明だけでは抽象的で理解困難と思われる事柄が、ビジターセンターの充実した教育環境を利用することで具体的に伝わる。昆布加工工場での工程の説明は、昆布の食べ比べや現場で働く人による説明を交えることで、

²G. P. ナブハン『雨の匂いのする沙漠』小梨直訳、白水社、1995年、115-116頁。

³ Alfred Runte, *National Parks: The American Experience*, 3rd edition, Lincoln: University of Nebraska Press, 1997, 236-258.

昆布の消費者である参加者が生産の現場に近づく経路を用意してくれた。その生産の現場に翌日実際に訪れることになる。昆布の消費者と生産の現場をつなぐ初日のプログラムは、二日目の赤岩地区訪問の意味を深めるのに重要な役割を果たしていると思う。

(2) ガイドについて

今回のツアーには、エコツアーのガイド（後藤さん）、現在の昆布漁師（井田さん、川口さん）、番屋という故郷をもつ人たち（川端さん、中村さん）をはじめ、複数の案内人がいた。しかも世代の異なる人たちで構成されていたため、ガイドの複数性が際立っていた。このガイドの複数性は次の点で優れている。

- 多角的な説明：エコツアーのガイドによる客観的説明と、現場の経験にもとづく物語的説明が、人の手の入った自然を多角的に考えることを可能にする。一元的な説明では概念的すぎたり、逆に感情に流されたりして、価値観の押付けに陥ることがあるが、多角的な案内によりそれがうまく回避されている。
- 世代間交流：若手の後藤さん、中堅の現役・井田さん、川口さん、さらに年上と思われる川端さん、中村さんという異なる世代による構成は、本ツアーが、昆布漁の暮らしを古き良き過去としてではなく、持続可能な未来を考える場として次世代に伝えられるべきものと位置付けていることを示唆している。持続可能な未来への方向性が、言葉によってわざわざ説明されるのではなく、ガイド体制から自然と感じられる形になっていることに、昆布漁文化への愛おしさが滲み出ているように思われた。

(3) 目的について

本ツアーのパンフレット冒頭に、「伝統的に続く羅臼昆布漁法・先人の苦勞を知ることは、知床における人と自然[の]関わり合いや共生の歴史を知り・考えること」とある。前半に記されている昆布漁や先人の苦勞については、ツアー参加を通してよくわかったが、後半にある〈共生〉をめぐるより一般的な問題へのアプローチは具体性に欠けているように思われる。言い換えれば、ツアー内容が昆布漁の文化に終始し、それを通してツアーが何を目指しているかが明確に伝わってこなかった。

目的が羅臼昆布漁を学ぶことにあるのか、赤岩地区の番屋見学等によってかつての暮らしを知ることにあるのか、それとも昆布漁の暮らしを契機として持続可能な生活を考えることにあるのか。おそらく最後の点に目的があるのだろう（それは上述したツアー構成に示唆されているが、あくまで示唆のレベルに留まっている）。無論、目的を明確にすることは、価値観の押付けにつながる恐れがあるため、慎重な姿勢が求められる。しかし、ツアー内容やガイド構成がよく練られているのに対し目的が曖昧であったことは、今後検討すべき課題であろう。

ガイドの複数性の項目で指摘したように、本ツアーの売りは知床を多角的に知ることにあると思う。そこをツアーの目的とするような形で案内文を再検討してはどうか。

おわりに

冒頭で言及した作家・石牟礼道子のほかに、本ツアーを通して私は何度か、写真家・星野道夫の言葉を思い起こした。星野はアラスカをはじめとする原生自然の写真で知られるが、彼がアラスカに惹かれたのは「原生自然」ではなくそこに「人の暮らし」があったからだという——「たとえば僕は南極には興味がないんですよ。人が暮らしていないからだと思うんです。アラスカにひかれるのは、やっぱり人が暮らしているからなんです」と星野はインタビューで語っている。⁴

人のいない、人を寄せ付けない現生自然の保護と、人が世話をしてきたことで豊かさを保ってきた自然の保護、これらは両方とも重要である。そして、保護のあり方はそれぞれに応じた形で考える必要がある。世界遺産・知床の豊かな自然に人の暮らしが深く関わっていたのであれば、そこで築かれた人と環境との関係を学ぶことは、個々人が現代の生活や環境観を批判的に再考しオルタナティブな暮らしを探求する上で不可欠であろう。

伝統的な昆布漁を具体的なフィールドとする本ツアーは、知床の豊かな自然と不可分な人の暮らしを考えさせるだけでなく、持続可能な未来を考える視野を提供しうるものである。その意味で、エコツーリズム、環境教育、環境思想をはじめとする様々な分野において、本ツアーがもつ潜在的意義は決して小さくない。

⁴ 湯川豊『終わりのない旅——星野道夫インタビュー』スイッチ・パブリッシング、2006年、92頁。

「知床岬赤岩地区羅臼昆布エコツアー」の意義と可能性：
エコツーリズムによって生まれる、場所の多角的な体験と価値観の交流
豊里真弓（札幌大学）

はじめに

2016年8月12日(金)～13日(土)に実施された「知床岬赤岩地区羅臼昆布エコツアー」は、知床半島先端部の地形・気候の特徴と羅臼昆布漁の文化・歴史について学べる非常にユニークで有意義な内容であった。実は、ツアー名称を初めて聞いたときは、知床で昆布漁について学ぶことがどのような意味で“エコ”ツアーなのか、すぐにはイメージできなかった。おそらくそれは、人間と自然を二項対立的にみる自然観や原生自然の価値を謳う自然保護観の影響があったのだろう。もちろん、いわゆる“手つかずの自然”の保護も重要で喫緊の課題であることに異論はない。だが、一方で、ヒトには生きるために自然と接してきた文化もあり、それを認識したうえで自然について考えることも大切なのではないか。その意味で、今回の昆布エコツアーの一つ目の意義は、後者、つまり、人が生活を営むなかでいかに自然と接してきたかという文化的側面に光を当てることによって知床という場所を多角的に見ることを促すことだと思う。さらに、二つ目の意義だが、様々な人がこのエコツアーに関わることで、ツアー自体が多様な価値観や見解が交流する場となりうることなのではないかと思う。以下で感じたことを少し詳しく述べていきたい。

エコツアーの内容と方向性：人と自然の関わり

昆布エコツアーの構成は、二日間にわたって羅臼の様々な場所を訪れながら（道の駅知床・らうす→羅臼ビジターセンター→羅臼昆布倉庫→昆布漁師さんの作業場・干場→相泊漁港→知床岬灯台付近の海上→赤岩地区→ルサ・フィールドハウス）、ツアーガイドによる説明に加え昆布漁師の方々や岬先端部での居住経験のある地元の方々の話を直に聞く、というものだ。この地域ならではの学び・体験のプログラムとしてよく企画されたと思う。全体として、資料を見たり話を聞いたりするだけでなく、昆布倉庫の香りや海中に昆布の密集する様子など、実際その場を訪れることで立体的に理解できることも多かった。その中で特に印象に残ったのは、野生動物・植生への配慮と昆布にかかる手間、そして、岬先端部にかつて人が居住していたという歴史である。

海や野生動物のいる地域に、そして漁場や仕事場に「おじゃま」するにあたって、普通の観光とは違う意識が求められる。ツアー初日は、まずスケジュールや地図、「セルフチェック・承諾シート」、「羅臼の昆布漁 むかしむかし」等の資料が配布され、昆布エコツアーのねらいと注意事項の説明を受けた。特に、ヒグマ対策として、出遭わないようにするためにどうするか、石浜のどこを歩くか、万が一出遭ってしまったらどうするかの説明があり、みな真剣に聞いた。私はヒグマの行動や習性をあまり知らないた





め、「飲み物にはおいの出るジュース類はNG」というような細かい点まで説明があり、野生動物の棲み家を訪れる際の心構えを学ぶことができたのはとてもためになった。また、羅臼ビジターセンターでは、羅臼とその海にすむ野生動物のはく製や骨格標本などがあり、人間と野生動物との空間的近さを強く感じるとともに、それぞれの生物との共存、あるいは、棲み分けの

在り方に興味が湧いた。

また、ツアー二日目に知床岬先端部に上陸するにあたっては、動物だけでなく植生への影響にも細心の注意が払われていた。相泊港から屋根なし・トイレなしの小舟に乗り込む際、容器にはられた液とブラシで各自の靴底をきれいにしたが、これは外来種を持ち込まないための対策だ。ここまで気をつけるのかと感心する反面、今回のツアーとは別の方法で先端部に入る人々の外来種対策はどうなっているのか疑問も抱いた。というのは、その前日に羅臼ビジターセンターから間欠泉に向かう歩道で、センター職員が草むしりをしてい



るのを目撃していたからだ。聞くと、オオバコが繁殖しないようにとのことだった。ビジターセンターには外部から車でやってくる人が多いはずだ。釣りやトレッキングの人々も、先端部に向かう前にどこかで外来種対策をする仕組みはあるのだろうか。

昆布漁に関しては、ツアーでの見学が、出荷前の昆布の並ぶ倉庫での味比べと料理法の話からはじまり、次に「現代の番屋」で



伸されたり巻かれたり湿りを入れるため並べられる昆布にかかる手間を目の当たりにし、最後に海での昆布の収穫、と時間を遡るように進行するのが興味深かった。この味を守るための手間を惜しまないし、また、品質の良い昆布のためなら先端部への移住も厭わないということなのか。赤岩の石浜も手でならし、草をむしったという。何かやるに値する価値を見いだせば、人は大変でも効率悪くてもやるのだなと感じた。今の時代でも、本当に手間のかかる作業であり、海中を覗くための箱メガネを波で揺れないよう口だけでくわえて固定し、手でさおを操る技術には驚嘆した。





先端部赤岩地区の最古の番屋は、嵐になればどんなに恐ろしかっただろうと思ってしまう建物だが、たくさんの家族がコミュニティを形成し、一つの村だったようだ。親と一緒に渡ってきた子どもたちのために小学校の先生が来て授業をしたという。子ども同士遊んだ話の合間に、あの頃この花はなかった等気づいたこともあったよ

うなので、ここ数十年での半島先端部の植生の変化についてもっとゆっくり聞けたら興味深い発見もあったかもしれない。かつて岬先端部にすんでいたという川端氏も、群生していたガンコウランの実をたくさん食べていたが、あの頃のような花畑は今見られないと言っていた。居住者たちは当時、天候や波を読み、岩場や草花もよく見ていたようなので、彼らが見ていた景色も知床の歴史の一部として記録しておくのもいいのではないかとふと思った。



このように、昆布エコツアーでは、この場所で人々がいかに漁をし生活してきたかの一端に触れることで、厳しい自然のもたらす恵みの部分を知り、また、すぐ傍にいる動植物の生息地としての知床も意識することができた。何より、岬先端部の風景を「懐かしいなあ」と言う人の存在にははっとさせられ、いつの間にか日本の原風景として言及されることの多い



里山も相対化してくれる。知床の文化に光を当てることによって、手つかずの自然のイメージが強い知床という場所を多角的に見られる内容には満足している。

ひとつだけ欲を言えば、もっと船上でも地形・地質についてのレクチャーがあれば、視点がさらに時間的に膨らんだかもしれない。個人的に、羅臼ビジターセンターでの地形と気象の説明は大変わかり易く、なぜ羅臼、赤岩地区での昆布漁なのか、羅臼への移住者が海の地形のよく似た場所から来たという話も面白かった。昆布漁の歴史がある意味地形によって作られたと言っても過言ではないからだ。合わせて、例えば、岬先端部に群生



していたというガンコウランはどんな経緯でここにいるのかや、溶岩が隆起したような岩もいつ頃のもので、その影響が今どんな形で現れているのか等の話が聞けたらいい。今あるものの姿が様々な条件がパズルのように組み合わさることであるとしたり、場所や生物はより愛おしい。

場所を開くチャンネルとしてのエコツアー

以上述べてきたようなことから、昆布ツアーは、まさに、地域の自然や文化を観光に生かすこととそれらの保護・保全の両立を目指すエコツーリズムの理念に沿ったものと言えるのではないかと（日本エコツーリズム協会ウェブサイト参照）。このようなエコツーリズムの方向性は、環境と同時に社会・文化を視野にいれることができる点が強みである。環境への危機意識の高まりを背景に 1990 年代に生まれた文学批評の一ジャンル「エコクリティシズム」（あるいは「環境批評」とも呼ばれる）でも、2000 年代以降、原生自然の価値に偏った自然保護のあり方に、特に社会的マイノリティや第三世界から疑問が呈されるようになってきている。（c.f. Nixon, *Rob Slow Violence and the Environmentalism of the Poor*. Harvard UP, 2011[『スロー・バイオレンスと貧しき者たちの環境保護運動』]）それは、換言すれば、環境をめぐる問題には様々な価値観や立場の人が関わっており、自然保護・環境保護が社会・文化への視点を欠いては成り立たなくなっているからである。

知床・羅臼での取り組みは、ツアーが伝える内容自体だけではなく、様々な価値観の人が関わることで、地域の人々も来訪者も互いの持つ知床に対する価値観に触れることができ、互いの変容につながる可能性があるのではないだろうか。つまり、様々な人がこのエコツアーに関わることで、ツアー自体が多様な価値観や見解が交流する場となりうるのではないかと。ここまで協働するのは関係者全員の多大な努力があったと推測するし、すぐに何かが生まれるわけではないかもしれない。それでも、場所の意味を内と外に開き続けることは、気候変動や様々な要因による生態系の変化を迎えそうな今後のために、大きな意味のあることだと思う。



最後に、昆布エコツアーの実現に関わったすべての方々と 2016 年度最後のツアー・スタッフに感謝の意を表します。



(中央：朝日の上る数分だけ滝が火のように赤く色づくことがあるという)

子どもの時間と心の造形力

富田俊明



総評

モニターとして、ツアーに対する総合評価を最初に示しておこうと思う。まずテーマであるが、自然遺産として認知される知床だが、そこに確かにあった（そして現在もつづく）人の営みを伝えていくことには意義がある。また歴史が浅いと言われる北海道にあって、炭鉱や大規模農業といった、近代的・工業的な歴史とは違う、自然との関わりの中で営まれる昆布漁には、また違った北海道の歴史の姿がある。資源の一方的搾取的な利用とは異なる、山と海、自然と社会、身体と食などの対話によって成り立つ昆布漁からは、持続的な自然との交渉という現代的なテーマを考えて行くことが可能である。そこから、世界自然遺産としての知床が強調する「原始的な自然」というイメージを改めて問い直したり、国立公園としての規則化と、それ以前の暮らしの仕来りとのネゴシエーションの問題など、考えさせられることは多い。

さて、実際にツアーに参加しての感触から、その魅力について語ってみたい。まず、身体感覚で感じられる魅力についてだが、それはまず昆布の香であったり味としてあらわれてきた。ツアー第1日目では、現代の番屋見学で、熟成される昆布の馥郁たる香が特に印象に残った。私にはまるでワインの香のようだったが、人によって感じ方は違うのであろう。また、第2日目では、小さな漁船に乗ること自体が、ワクワクする体験だった。海から眺める知床半島の海岸線は素晴らしかった。第1日目にビジターセンターで知床半島の模型を前に説明された通り、ペキンの鼻から急に晴れてきた。赤岩地区の湾に入ると、透き通る水の下に褐色に輝く昆布が美しかった。この日はガイドさんも驚くほど沢山の漁船が湾に集まっており、船に揚げられた昆布の大きさと厚さと量からも、ここが特別な場所なのだと実感できた。

今回のツアーでは、ガイドさんの魅力も大きかったように思う。知床に惹かれてここでガイドになったという知床らうすリンクル後藤菜生子さんのひたむきさと、地元・羅臼の川端隆さんと中村豊子さんの愛嬌のあるキャラクター。昆布漁に忙しい漁師の皆さんが親しく接して下さったのも、地元の繋がりからだとしたことだが、まさに普段の素顔を見せてもらえて、こちらもこの場所と人々に親しさを憶えることができた。プロのガイドさんと地元のガイドさんのコンビも良く、それぞれの知床の暮らしに対する思いが良く伝わっ

てきた。ちなみに、私は仕事の関係で釧路に住んでいるが、博物館の学芸員の炭鉱に対する思い入れの過剰さに辟易したことがある。当事者ではない研究者の独りよがりなロマンチズムの押しつけに何か不健康なものを感じた。それに比して、プロのガイドである後藤さんと、地元ガイドの川端さんや中村さん、また漁師さんたちとの関係性は、互いへの信頼が見えてとても気持ちのよいものだった。

まるでロストワールドのような知床半島の海岸風景や、漁船での帰路のラフティングのような激しさや、港へ取って返す漁師さんたちの操船の凄まじさに圧倒されたのも、なかなか鮮烈ではあったが、やはり私にとっては、ガイドさんの人間的な魅力が印象的だった。短いツアーで、この場所の生活を感じられたのは、地元ガイドさんたちの体験談によるところが大きい。今回は時間の重層性ということ強く感じた。赤岩地区に近づくにしたがって、時間を遡るような感覚があった。それは、大正時代から云々という知識や情報ではなくて、地元ガイドさんたちの切れば血が出るような語りのせいだろう。私はガイドさんたちの中に今も生きている「内なる子ども」を見ていたし、そこに共感していた。また赤岩地区に上陸後、後藤さんが過去の写真をパネルにして示しながら解説してくれたおかげで、過去と現在の二つの時を見ることができた。そして、ツアー後に、ギャラリー・ミグラードで「知床岬の昆布漁」の写真展示を見ながら、今見てきたばかりの最古の番屋がまだ新築の状態であったり、ガイドしてくれた川端さんが若い頃に真冬に赤岩地区まで探検に行ったときの様子などを、写真の中に見つけて、私の中に羅臼の時間が重なって行くのを感じた。ツアーの体験のあとだからこそ、そのように感じたのだろう。羅臼から半島の先へ、行って戻ってくるという空間の移動につれて、時間を旅したような、不思議な体験だった。ビジターセンターで半島の模型を見る→昆布倉庫で完成された昆布を見る→現代の番屋で熟成中の昆布を見る→漁船で赤岩地区まで行き収穫される昆布とその生育する場所を見る→ギャラリーで過去の景観を見る、という順番が、私にとっては面白かった。



最古の番屋を前に、昔の写真を示せるガイドの後藤さん。
イサベラ・バードの旅にインスパイアされた金坂清則のツインタイトムトラベルを思い出した。



(左) 真冬に赤岩地区へ探検した川端さんがテレビに出演 (右) 羅臼への最初の観光客
左右とも、ギャラリー・ミグラードでの「知床岬の昆布漁」より

総評の最後に、このツアーの目的について、問いかけてみたい。このツアーは、誰が誰に向けてやっているものなのだろうか？ 目的について、ターゲットについて、もう少し具体的であってもいいような気がする。私は美術家なので、何でも「表現」と捉えるのだが、このツアーという表現は、誰が誰に向けて何のためにやっているのだろうか？ どんな表現も、最終的には自分に向けてするものだろう。しかしそこで「なぜ？」を深めていかなければ、本当に人に届く表現にはなっていない。先に、ガイドさんたちの魅力について述べたが、それに対してツアーの目的とされる「漁業と自然との共生の歴史・文化を後世に遺したい」という題目は、私にはそれほど迫って来ない。むしろ、それは自分たち自身あるいは自分のコミュニティの次世代に残すべきものであって、それを私であるとか観光客などの他者に訴えるのは、どこかズレていないだろうか。何かを遺そうという欲望は、たいていその何か失われるという感覚の中で生まれるものであるが、果たして羅臼昆布という産業は本当に消えてなくなりそうなのだろうか？ 私にはそのようには思われなかつ

た。たしかに赤岩地区は、便利になった漁船で日帰りできる場所になり景観が変わった。こうした産業構造の変化に伴って失われる景観というのはあるだろうと思う。私はこうして失われる風景に対して過剰なノスタルジーを抱えたり、それをましてや共生の歴史といったような題目に置き換えて主張することにリアリティを感じない。逆に、リアリティを感じたのは、赤岩地区で子ども時代を過ごした川端さんや中村さんの思い出話やそれを語る嬉々とした様子から、彼らの中に息づいている子どもの存在であった。そこには無心の喜びを与えてくれた場所への愛がある。そこには大人の主張するようなお題目の入る隙はない。失われると言えば、日本中でたくさんの景観が失われている。産業構造の緩やかな変化ではなく、社会構造の歪みから出た災害によって、移住を余儀なくされる人々がある。激烈に、複雑に、深く破壊が進行している。そんな中、懐かしむ暮らしと土地があることはむしろ幸いである。

私は美術家として、保存することよりも創造すること、懐かしむことよりも変化を生きることに価値をおいている。社会は成長の限界をむかえ、すでに平行期に移行するための、難しい時代に入っている。そんな中、何を情報化し、何を消費するのか（これは観光のテーマでもある）。そういう思考の中で、最近、「消費」ということをめぐって考えが変わってきた。つまり近代社会は禁欲的で生産至上主義的であり、そのために多くのことは手段的・道具的だった。しかし消費の喜びこそ人間に根源的なことなのだと。つまり「それ自体が喜びである」ということ。空を見上げて心躍らすこと、砂浜に着いて真っ先に駆け出し、一見何もない場所を遊び尽くすような子どもの心こそが、それを知っているのではないか。ここでいう消費とは、商品の消費ではなく、資源や環境を破壊しない根源的な消費、つまり喜びや幸福の体験を引き出し増幅させる非物質的な消費のことだ。アートやデザインは物質的な限界に直面している現在まさにこれからその本領を發揮していこうし、エコツアーもそうした時代の流れに沿うものであろう。

話が少し逸れてしまった。ツアーの目的について。提示されたのかも知れないがあまり記憶に残らず、それでは観光商品としてはダメなのかもしれないが、逆にそこが面白かったと言える。それはつまり、積極的に自己の問題意識とつなげて意味を見いだしたい（つまり私のような）タイプには、テーマの押し付けがましさが無く自由に想像を広げられる非常に魅力的なツアーだった。そうであれば、そういうものだと最初に断っておく必要があるかもしれない。参加者が自分でワークすべきものだと。受け身な観光客にはキツイかもしれないが、きっと私のようにお仕着せのパッケージには満足しないという人たちが日本にも海外にもたくさんいるだろう。そういう人たちを相手にしてはどうだろうか。そういう意味では、今回のツアーの最後に行われたモニターが集まったのヒアリングは、それぞれの問題意識や世界観をシェアリングできる豊かな時間だった。そういう時間をツアーの中で、たとえば羅臼昆布のさまざまな楽しみ方を味わいながらシェアリングするような時間を設けたりすると、参加者が自ら作り出す意味を持ち帰るツアーになるのではないか。またそこから羅臼の人たちも学ぶことが少なくないのではないか。

総評として、思うところを書かせていただいた。今回のツアーでは、宿泊や食事までケアしていただいて、大変感謝している。羅臼の観光事業は、豊かな自然とその恵みに依って生きる暮らしを紹介するということで、現代社会に対しても、知床自然遺産に対しても、意義深いものだといえる。ただ、あまり説教臭くならず、先にも述べた「それ自体に喜びがある」ということを考えてみて欲しい。

※ツアーのテーマが記憶に残らなかった件について。「漁業と自然との共生の歴史・文化を後世に遺したい」にあった「歴史」「文化」等のワードに対して、いちいちそれは何だったのだろうと疑問が湧き起こって、題目を鵜呑みにはできなかつたせいもある。どこから「歴史」化は始まるのかとか、単なる「生活」と「文化」を分けているのは何かとか。ちなみに「文化」は「文華」だと勝手に思っていて、ただ生活に追われるところに「文化」は無いと考える。そこに＜華＞すなわち奢侈な感覚が無ければダメで、それは先述の「消費」の話につながる。

次項以降は、「自己の問題意識とつなげて意味を見いだしたいタイプ」の旅行者としてのメモである。

「子どもの時間と心の造形力」

羅臼で出会った3人の子どもたち

短い夏の日、羅臼のエコツアーに参加してきた。このエコツアーで、私は3人の子どもたちに出会った。その子どもたちは、今は立派な大人の中において、なおも自分の時間を憶えている。以下では「子どもの時間と心の造形力」をキーワードに、このツアーを振り返ってみたい。

まず一人目は、現代の番屋見学でお邪魔した川口さんである。もちろん、羅臼昆布の製造過程を見せて頂き、熟成された昆布の馥郁たる香りも印象に残ったが、むしろ外に出て干場の傍らで、川口さんが子ども時代に、足場の悪い干場で仲間たちの野球をした話に、生き生きとイメージをかき立てられた。



干場での野球と特別ルールについて語る川口さん

2人目と3人目は、翌日相泊漁港から半島の先に向けて乗った船で、ガイドをしてくださった川端さんと中村さんである。2人は、赤岩地区での子ども時代の話をいかにも楽しそうにしてくださった。川端さんは、赤岩地区のさらに先の、番外地の番屋で過ごし、お気に入りの丘の上で、口の周りが染まるほどにガンゴウランを頬張っていたとか。中村さんの様子や言葉から、この場所がとても好きだった少女の姿が想像できた。ちなみに妹さんはここがあまり好きではなかったようだ。その話で、私は自分の妹のことを思い出した。私は母方の故郷が大好きだが、妹はそうではないようだ。兄弟姉妹でもそういうことがある。聞けば2人とも、このツアーは仕事半分、本当は懐かしい赤岩地区に戻るチャンスを待っていたのだという。



(左) 赤岩地区へ向かう漁船で、子ども時代について語る川端さん (右) 最古の番屋の前で話をする川端さん



(左) 赤岩地区の砂浜を歩く川端さんと中村さん (右) 最古の番屋の中から、カメラを持って歩き回る川端さんが見えた

子どもの造形力

子どもが、無心に遊びながら、その場所を自分のものにしていく力には、底知れないものがある。例えば、イスラエルの国民的詩人ラヘルは、現代ヘブライ語が復活する時期に詩作した人だが、創作の参考にしたのは、聖書と、幼稚園の子どもたちの言葉だったそうだ。幼児の造形能力は、死んだ言語を再生させるほどの威力がある。同じ力で、ある場所を遊び場として、そこにあるエレメントと深く結びついて行く。大人が大人の時間の中で労働している間、子どもたちは子どもたちの時間で、不思議な造形を行っているのだ。今回のエコツアーが、こうした子どもの時間をそこで過ごした人たちによる道案内だったことで、私のなかの子どもが呼び覚まされ、子どもの目線で知床の海岸、そして赤岩地区を眺めることになった。それはとてもワクワクする体験だった。

川端さんや中村さんにとっての赤岩地区を想像しながら、私は自分の子ども時代のことを思い出していた。私が生まれ育ったのは、神奈川県相模原市というところで、最近政令指定都市になったところだ。人口は70万人、平均年齢は40歳。ここは流れ込む移住者によってかき回される巨大な郊外である。そんな中で育った私にも、子ども時代のお気に入りの場所がいくつもあったが、そのほとんどは開発によって失われてしまった。あらゆる世代が場所との結びつきを失うこの土地の状況を、私は勝手に「相模原病」と名づけている。記憶を支えてくれる場所の喪失は、逆説的に精神的な造形力の重要性を教えてくれる。美術家としての私の代表作『泉の話』は、一見何も無い土地に、神話的なつながりを取り戻す試みであって、それは子どもの持つ造形力と関わりがある。私が指導した学生の中に、故郷・宮古島の創世神話を創り出した者がいた。その創作によって、彼は自分自身の中に眠っていた故郷を思う強い気持ちに気づいたという。つまりそこに人がいて場所があるだけではだめで、その人が造形力を発揮してその場所と結びつくことが重要だ。それも、一般的なものではなく、自ら創造したユニークなもの、さらには神話の層まで至るような深いものであれば、その人個人を超えて、より多くの人々が共感できるものとなる。

思えば、子どもの無心の時間は、とてつもない造形力を持つ一方、無意識的なものにとどまる。むしろ、大人と子どもを行き来するような心の動きの中で、造形力は意識的に使われるような気がする。それこそ「大人=子ども」としての芸術家の力であり、ほとんどの人が未開発のまま眠らせている力だ。

大地の造形力と心の造形力

相泊港を出て、知床半島の迫力ある奇岩を見ながら、川端さんの話を聞いていたせいか、大地の造形力と心の造形力が重なるような気がしてきた。あながち、これは突拍子もない連想ではない。大地のカタチは人間の想像力を刺激するというのは本当である。オーストラリアでの1年間の調査の中で、先住民の神話体系である「ドリームタイム」が、大地の造形と密接に関わっていることを実見してきた。また私が精神的なよりどころとする出羽三山の羽黒派古修験道でも、山の聖地をめぐる巡礼のなかで、場所のカタチと精神的な意味は不可分に結びついていて、古人のものを見方を造形的な言語で語りかけてくるのだった。



知床半島の奇岩。大地の造形が心の造形力を刺激する。

そういう意味で、羅臼で20年来続けられていると言う「ふるさと少年探検隊」には注目したい。夏の一週間、子どもたちは先達に導かれて半島の先を目指すと。世俗的な行事ではあるが、私の目には、ある種の通過儀礼のように見える。このような体験をとおして、子どもは深く場所と結びつくことができるだろう。地域の共同体が、子どもたちのためのこのようなイベント（＝儀礼）を持っていることは、現代においてとても意味深いことだと思う。

とみた としあき（美術家・北海道教育大学釧路校准教授）

知床赤岩地区羅臼昆布エコツアーとギャラリーミグラードの役割

2016/09/10

藤木正則

○知床赤岩地区羅臼昆布エコツアー

ツアー終了後、宿泊先で KAI という雑誌の「シリエトクに漁労の歴史あり」という体験談記事のコピーが配布された。その内容はとても良くできていて、まさしく同感であった。私が体験したツアーもほぼ寸分の違いもなくと言って良いぐらい、そのものだったからだ。3年の間に、これほどまでにマニュアル化され再演できる内容に仕上げられていることに驚いた。同じ内容、同じ質と量を提供する。自然が相手のことなので、ある程度計算していても思い通りに行かないことも多いに違いない、だから今回はたまたま似たような結果に成っただけかもしれないが、その点には感心させられた。エコツアーを含め、あまりにもツアー全般に今まで興味を持ったことがなかったので、ただただ驚くばかりであった。確かにツアー内容とはこのようなものなのかもしれないが、逆に考えると知識の伝達において慣れることの恐ろしさや情報の刷り込みにならないように注意を払うことも多少は大切なものなのかもしれないとの感想も持った。また価値観の違う視点や批判的な見解も地元漁師の人々の語りには、普段の言葉として織り込まれていて参加者にこの昆布エコツアーを通して「知床エコツーリズム戦略」なるもの、または“観光と自然保全の有り様”を考える機会を提供していたのはエコツーリズムの核心の一つのような気がした。そして、それはまた語る側自身への問いかけにもつながるような気がした。

○ 知床先端部上陸と観光について

この赤岩地区羅臼昆布エコツアーの重要なポイントである現地上陸についてはやはり触れるべきだろう。まず基本的に、上陸後の内容を含め、このツアー自体が夏の短い期間に限られたものであり、また実施される条件が天候等によって厳しく左右され、利用される船のキャパシティーもそれほど多くないことから、ツアー要素としての上陸を特段規制する必要はないように感じた。次にツアー要素としての上陸の是非から少し離れて、人がその地に立ち、そこならではの肌理を五感で体験することの意味合いについて考えてみたい。偶々、現

場に行くことの意味を作品化し、それについて書いているアーティストがいた。現代美術家の開発好明氏は福島飯館村に「政治家の家」を作った目的を次のように話している。「無人となった飯館村を自分自身の目で見ながら、避難区域20キロ近くの場所まで来て頂いて、個人レベルで原発や今回の問題を考えて欲しくて制作しました。」また次のような話もしている「仮設住宅に関しては、プレハブやログハウスなど様々な工法で設置されて、真新しく外から見ると綺麗なのですが、12年の1月ぐらいにお世話になった方の部屋に入らせて頂いた時に、何とも言えない気分になりました。＜中略＞福島、飯館村、仮設住宅なども外から見ると中から見るとは大きく違うのです。」また、福島に関連してこのような内容の話もしている。「昨日は福島第一第二原発見学に行きました。福島に関する仕事をしていて一度は現状を知っておくべきだろうと思っていました。＜中略＞構内をセメントで覆い、雨の侵入と放射能を抑える事で仕事もだいぶ進めやすくなったそうです。原発で汚れた地下水は他から流れ込んでいるのではなく原発周辺の地上からの雨水が原因だという話でした。それで地表を塗り固めたようです。」セメントで覆われている施設内はそこへ行った者が語ることによって初めて現実味を帯びてくる。開発好明氏は体験の重要性を「自分の目で見ると、知って行って改めて改めて大切だと思いました。」と締めくくった。



この写真はネットから



「美味しんぼ」の題材としても出ています。

写真は開発好明氏のFBより

話をまた知床羅臼の浜に戻そう。ツアーの船からはシーズンなのだろうか、鱒目当ての釣り人が小さな河川が海に流れ込むあたりに大勢上陸して釣りをしている姿を目撃できた。多分、知床の先端部とは違った扱いだから規制も緩やかなのだろうか、今回のモニターツアーと比較してもレジャー目的なのは誰の目にも明らかであった。先端部はこれ以上自然を破壊しないようにという保全の意思が強く働いているのかもしれない。テトラポットが散在する先端部以外の場所はまだ既に自然が侵されているからレジャーについても公認されているのだろうか。テトラポット撤去を含めた自然環境保全／復元などの選択肢に関連して考えると現況の判断の整合性はどこまであるのだろうか。たった二日間のエコツアー参加者の目からも、自然に対する保全の線引きの曖昧さというか、ご都合主義的で権力・利益誘導による「観光利用」の知床が感じられるのは少々辛い気がした（あくまで推測だが）。広い視野に立った公平な判断と観光立地に頼ることが本当に地域の自律かどうかという「知床エコツーリズム戦略」自体の検証も改めて行って欲しい。先に紹介したアーティスト開発好明氏は種子島での国会議員と地元の方々とのオープンな対話に参加した時の話で、島民の一人がこう話したことを記している「土建から農業にシフトして観光に頼らない島にしなくては」・・・知床エコツーリズム戦略では観光知床を大手資本から地元資本に移行することでの自律が基本戦略のひとつになっている。しかし

本来的に自律する覚悟の方向性はどこにあるのか、観光に頼っている限り自然も失い地元の貴重な産業も失いかねない。地域の自律もそこに関係してくるような気がしてならない。

○ギャラリーミグラードの役割

まず、この時期開催されていた企画展「The Last Harvesting - 知床岬の昆布漁 -」の話をしたい。私がギャラリーの展示を見学したのはツアー初日、同じモニターツアー参加者が道の駅などで販売物のリサーチをしている時間であった。だから誰かに急かされることもなく、約一時間弱かけて50年ほど前の赤岩地区での番屋生活の様子を写真とキャプションを通して堪能した。四つの展示室を使った展示自体も額縁などを使わず、あくまで白黒写真を中心に白壁の中から陰影と線によって語りかけてくるような繊細な配慮があり好感を持った。そして、意外かもしれないが実際の体験ツアー以上に、この写真展示からの方が知床岬赤岩地区羅臼昆布漁の歴史文化については身体化された気がした。その感覚はどこから来ているのだろう。それはたぶん、写真展を見ることが任意であり昆布ツアーには含まれていなかったからだと思う。一人の時間は大切だ。キャプションがあっても、個人的に読み解く時間があり、自分のテンポで過ごせたからだろう。

さて、ギャラリーの話をもう少ししてみたい。ミグラードの立地条件の良さには驚いた。羅臼町郷土資料館や羅臼ビジターセンターもそれぞれ面白いと感じたが、ギャラリーのある場所は道の駅駐車場に隣接して町の中心といった印象を受けたからだ。この場所やギャラリーとしての機能も考えると、コンパクトながらも羅臼昆布資料室の機能もあってはどうかと考えた。羅臼昆布漁に特化した歴史や文化資料の常設展示についてだ。（もうすでに存在していて今回は見学できなかったのであれば申し訳ない）羅臼を訪れる全ての人々が知床岬赤岩地区羅臼昆布エコツアーに参加するわけではない。現状ではほとんどの人達が、それらの歴史や生活文化に触れることもなく昆布のお土産を買う程度で通過してしまう。そういった意味合いではギャラリーに併設する形で羅臼昆布歴史文化資料室（またはコーナー）は必要かもしれない。羅臼昆布倉庫でのガイドさんの説明パネルや全道各地の昆布見本など、それに壁に架かっていた天然

昆布（？）見本その他も工夫次第で即資料展示に使えるそうだ。話によく出てくる当時のチャッカ船の実物も見てみたい。（ギャラリー入り口付近に設置できないものだろうか）もちろん、企画展で展示されていた写真は常設展示されるべきものだろう。

参考に今から 8 年ほど前、北前船をテーマにした個展を大阪で行った折りにリサーチした堺市の昆布問屋「マツモト」の写真が出てきたので添付してみた。その時、倉庫の中で一番高価な昆布という話になり、開封して見せてくれたのが羅臼の「黒走」だった。また、この会社には昆布採りの道具や資料も展示しており、関西人の北海道における昆布漁への熱意を感じた。



株式会社マツモト商品開発の部長さんと倉庫管理の方



マツカの展示



鹿又利雄さんの羅白黒走昆布



昆布加工の様子を描いた掛け軸